

人間社会学科創設 40 周年を迎えて

中 田 重 厚

人間社会学科が当初、社会学科として創設された年は1965年（昭和40年）であるから、今年で40年目になる。学科創設当時の経緯はいま詳らかではないが、当初学科運営にあたった銅直勇教授の構想にはつぎの二つのことが含まれていたようである。一つは、学閥によらない自由闊達な学風を育てること、いま一つは、“人文学的なもの”を重視していく考え方である。第一の点については、こんにちまでその理念は継承されてきていると思う。学科の人事は常にそのことに配慮して進められてきたと思えるからである。つぎに、第二の点についてであるが、“人文学的なもの”を大切にするという視点は、社会学の分析手法が一層精緻化し、専門分化が進むにつれて、むしろ薄らいできているように思えるのである。こうした学問の趨勢に当学科も呼応してきているのであろうか。かつて、19世紀末から20世紀初頭にかけて何度も繰り返された精神科学と自然科学との大論争や、1950年代から60年代にかけての実証主義論争も、実は上記の一点をめぐるものではなかったか。いまいちど、このことについて、よく考えてみる必要がありそうである。

さて、学科創設30周年と40周年との間に経過した10年間で、わが人間社会学科は大きく様変わりした。なかでも、大きな変化は、2002年度から学科内に社会福祉士国家試験受験資格取得のための科目を開設したこと、いま一つは、

2003年度に学科の名称が「社会学科」から「人間社会学科」へと改称したことである。福祉の専門科目の新設については、かつて社会福祉関連の科目をいくつか担当されていた渡邊益男教授を中心に構想が練られ、具体化されるに至った。社会福祉の分野に精通した専門職業人の育成ということだけだったら、他大学で開設されているものと変わりが無いが、当学科では、あくまでも「社会学」の学問領域のなかで社会福祉の専門を究めていくことをめざすものであった。現在、児童福祉、高齢者福祉、障害者福祉などを担当する教員、福祉実習の指導員など福祉関連のスタッフが学科の構成員の半数を占めるにいたった。また、入学した学生のうち、この分野を志望する学生は、現在全体の約3分の1を占めるほどになった。

過去40年、社会は激変した。そして、いまなお変わろうとしている。私たち大学人は、時の流れに翻弄され続け、ややもすれば自分を見失いがちであるが、研究者としての気概を持ち、真摯な態度で社会と向き合っていかなければならない。いま確かに言えることは、私たちにとっては、日頃の地道な研究活動こそが、今後の学科のありかた、大学のありかた、学生の質、そして社会のありかたをも決めるその基をなすということではないだろうか（2006. 1. 17記）。

（なかた しげあつ、本学科主任・教授）

『明星大学社会学研究紀要』第26号

正 誤 表

頁	箇所	誤	正
1 頁	左段 4～5 行目	<u>銅</u> 直勇教授	<u>銅</u> 直勇教授
5 1 頁	左段 7 行目	①物質的労働	① <u>非</u> 物質的労働
5 1 頁	左段 9～10 行目	pp.143～187	pp. <u>177</u> ～187、 <u>および</u> p.245
7 2 頁	右段 12 行目	<u>S</u> ebastien	<u>S</u> ébastien

上記の通り誤記がありました。謹んでお詫びするとともに、訂正をお願いします。

明星大学人文学部人間社会学科
紀要編集委員会